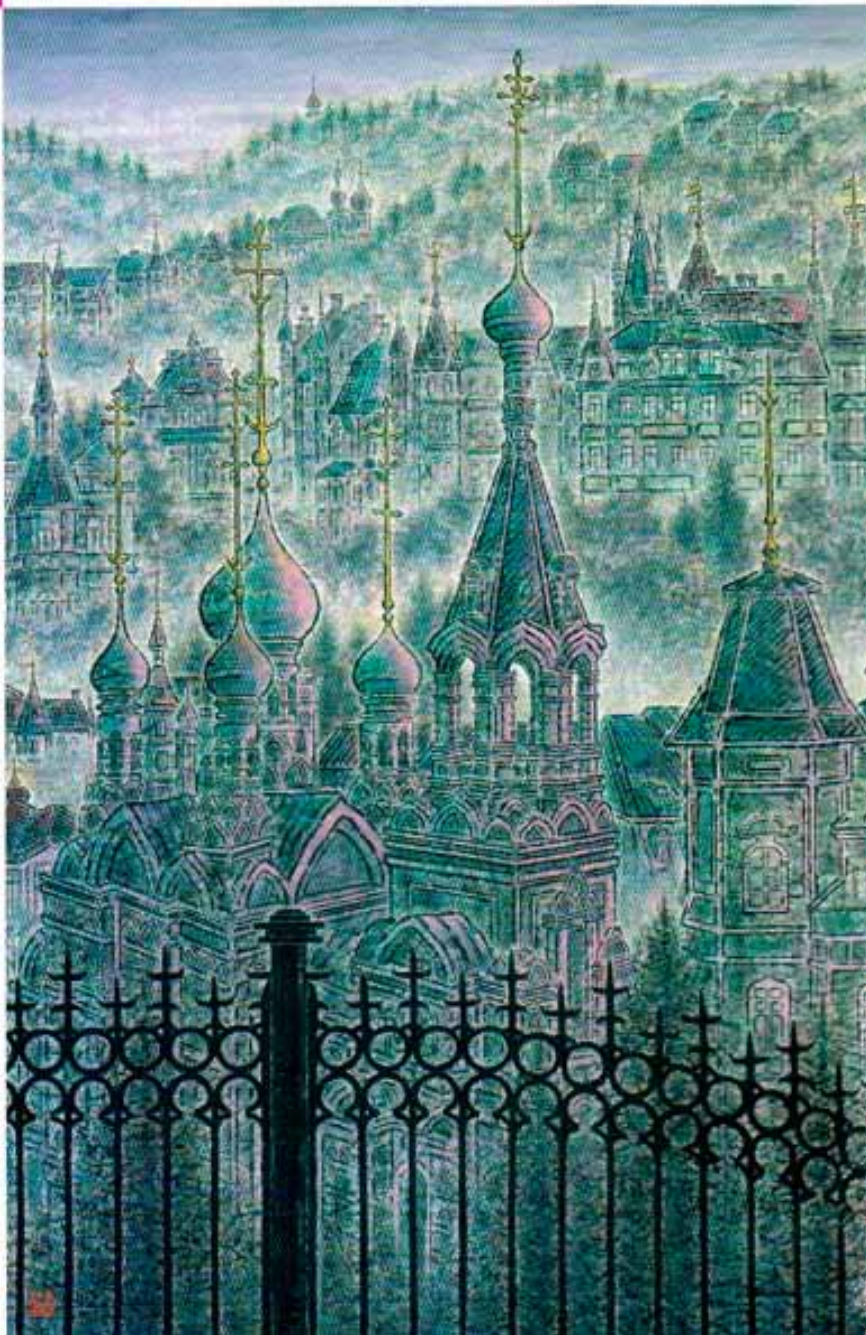


朝日新聞

1
2024

発行所：朝日新聞社



霜

降

能村 研三

鷹の木文庫

霜 降 や 積 み た る 薪 の 芯 赤 し

ち る 前 の 昏 み の 時 の 山 も み ぢ

水 の 音 眠 ら ず 山 は 眠 り け り

朴 落 葉 ふ み て 確 かな 音 か へ る

昨年の一月号の本欄で、「発行所分室」という一文を書いたが、市川グランドホテル近くの「市川分室」は余りにも狭く、支障をきたしていたので、昨年十月に新たな所に移転することになった。

新しい分室の場所は同じJR市川駅の近くだが、国道を渡り真間山弘法寺の参道を少し入った所で、閑静な住宅街にある。部屋数も三部屋あり、編集部や業務部の皆さんが仕事をすする部屋の他に、創刊号からの「沖」のバックナンバーを保管する書棚があり、独立した室を「鷹の木文庫」と命名し、書庫を作った。

野田に住む俳人秋尾敏氏が、自宅に併設して「鳴弦文庫」という図書館を開いておられる。この「鳴弦文庫」は、主に近代俳句の資料を収集している私設図書館で、氏のお父様の河合凱夫氏と、秋尾氏の蔵書がもとになっている。河合凱夫氏が鳴弦楼という別号を持っていたことか

節ごとに竹の力や神の旅

神の留守衝動買ひに悔いはなし

いち早き冷よぶ紙を漉き重ね

綿虫の徒党ありあり見ゆるかな

枯蓮のいま紊乱の限りかな

大根の干しぶり老の家らしき

ら、その名に由来しているそうだが、ここには明治時代の俳書が多数収められていて、江戸末期から近代初期にかけての旧派の宗匠の墨跡を見ることができるといふ。

「鷹の木文庫」には「沖」創刊からの五十数年の同人、会員が作られた句集や評論集を一堂に集めた他、先師登四郎の書庫にあった『折口信夫全集』や『水原秋櫻子全集』、『大野林火全集』など、今まで書庫で眠っていた貴重な登四郎蔵書も公開することにした。

まだ図書室としてのきちっとしたコンセプトなどは作られていないが、徐々に同人の識者の意見を聞きながら整備していきたいと思つている。図書の閲覧に加えて、貸出しもしたいと考えている。

定期的な公開日などまだ定めていないが、今月開かれる新年俳句大会の前に希望があればお見せしたいので、是非立ち寄りいただきたい。

能村 研三

銀漢の尾

森岡 正作

蓮掘りの

拍手の己に響く神無月
一閃の日矢白鳥を捉へけり
ぞろぞろと来て白鳥に見られをり
白鳥を観閲式のやうに見る
大口を開け短日の道具箱
山神へ黙礼捧ぐ薬喰
しらしらと燃ゆる枯菊憂国忌

十一月末に超結社有志の十数名で一泊二日の筑波山吟行へ出かけた。一番のお目当ての筑波山は予想もつかなかつた雷と土砂降りの雨に遇つて断念し、二日目の出発時も小雨模様で、運のない旅と思いつつ向かったのが蓮田であった。見渡す限り荒涼な景であったが二人（夫婦）の蓮根掘りの姿を認め、マイクロバスで狭い道に入り込んだ。最初は離れた場所から眺めたり写真を撮っていたが、俳句吟行の者ですとお願いしたらすぐ傍までどうぞとのこと、二十分程見学させて頂いた。「蓮掘り」の名句は多く、登四郎先生の御句にも（蓮掘りの終りはつひに放り出す）がある。収穫は泥の中での大変な作業であるが、今はポンプで送り出されたホースの水圧で泥を掻き分けて体も動き易く「放り出」したりはしない。先生の見た頃は身動きもままならぬ重労働だったのである。はたして昼の句会では佳句が多く、とことん見つめる作者の姿勢が勉強となった。今回の吟行記は「俳句界」二月号に掲載される予定であり、ご覧いただければ幸いである。

濤声集

野の楽

千田百里

* 百円玉入れて眼下の秋を統ぶ
野の楽の生れむ吾亦紅点々
寝ね難き暁なり坂鳥を見たり
流木を白々と置き冬汀
書き込みの重みに耐へて古曆
酔ひ笑ひ評して衆の年忘れ

平らかに

辻

美奈子

* 立冬や平らかに粥炊き上がり
期待ほど採れても採れなくても零余子
蓑虫の蓑抜かりなく仕上がりぬ
蛇穴に入る筋肉の拮抗す
借景に富士を賜る障子貼
露けしや、槽に眠る火縄銃

蒼茫集

いくつのまさか

頓所友枝

* 曼珠沙華いくつのまさか越えきしか
権現堂の堤を浮かす曼珠沙華
篠笛の高きいち音こぼれ萩
良夜かな膝折り象の眠るらん
母のことぼつりと話す温め酒
天高し空の向かうに戦あり

初雪

小野寿子

生者死者けふの冬日を同じくす
霜月や弱きがゆゑに祈りけり
石落咲いて庭石ちからみなぎるも
はみ出たる冬着の体温乱れ籠
* 初雪の消えやすきさまいとしかり
応ふるは風ばかりなり虎落笛

城下町

峰崎成規

*行く秋や職で町割る城下町
伏流水富士の爽気を一気呑む
狛犬の有給休暇神の留守
紅葉且つ散る夕日に吐息あるやうな
紙垂新たな風を新たに神迎へ
神輿庫の太き門冬ざるる

言葉編む

栗原公子

秋麗や木にも石にも神やどり
言葉編む手話の指さき風さやか
陶板のやうな青空まゆみの実
大花野ひきあげ時といふがあり
月今宵ひとりの部屋の流人めき
*微笑むは静かなる拒否秋澄めり

飛鷹選評



能村 研三

新しい年を迎え、新たに会員から同人へ推薦したばかりの時なので、「沖作品」の選評を書く時に先師登四郎も、果たしてこれに続く会員がいてくれるかどうかをいつも心配していたようだ。しかしその心配をよそに、本号には次の会員の勢いある波が押し寄せてくるよううれしく思った。

松はみな風のかたちの島の秋 曾根新五郎
昨年の途中から入会された曾根さん、他の結社でも活躍された方で、大きな俳句大会でも数々の賞を受賞される方でもある。伊豆七島の式根島が故郷で、島には頻繁に帰られるようだ。私はまだ式根島には行ったことはないが、きつと手つかずの自然と青く美しい海がきれいな所なのだろう。この句は島にある松を詠んだものだが、式根島の南側海岸の一带は「式根松島」と呼ばれ黒松が群生しているそうだ。海から吹き上げる風も強く、風の吹く方向に枝が靡いているのだろう。

火屋あかりのみの湯に入る 枯木宿 工藤 良丕
枯木宿というのは、庭や宿の周辺に枯木のある宿で、余り人の行き来がない鄙びた宿なのだろう。東北青森や能登地方にもランプの宿というのがあるが、おそらく電気も入っていないような所で、ランプだけの灯りでひなびた風情の秘湯である。枯

木は、冬木という語に比べ生命力が感じられないように思うが、枯木の宿には風が吹き日があたり人の気配がある。まだ空に明るさが残っているうちからぼつりぼつりと明るくなるランプの窓明りだけが頼りである。

太古より空の背骨や天の川 矢野 隆男
太古の昔から人は星をながめ、星を頼りに方角や季節を知りながら暮らしてきた。銀河系は成長・形成の過程にあった太古の昔に、別の小型銀河との大規模な衝突に見舞われた空の背骨のようにも見えたのだろう。

伴走者の綱の手応へ冬ぬくし 池田 文枝
バラスポーツの陸上競技で、視覚障害のある選手とガイドランナーと言われる伴走者が使用する綱がある。両端に輪がついており、走る人と伴走者がそれぞれを握って競技を行う。綱の手応えだけを頼りに走り抜く。まさに伴走者との二人三脚で行う競技である。「冬ぬくし」の季語が効いている。

栗食むや縄文の滋味身の中に 川和 宏平
古く縄文時代から人々の暮らしを支えてきた栗。栗の歴史は古く、青森県「三内丸山遺跡」など、各地の遺跡から炭化した栗が見つかり、その原始的な形態は、縄文時代から栽培が行われていたと言われている。そんな時代のことを考えながら、今なお親しまれている栗の滋味を堪能した。

冬天へ威を反り上ぐる大薨 石原 杏
「薨を争う」という言葉がある。「薨の高さを競うように大小さまざまな家が立ち並ぶさま」を表した言葉で、薨または棟瓦といった屋根の一番高い場所の高さを争う意からきている。奈良の東大寺や唐招提寺の大薨が思い出されるが、大寺の威を象徴しているかのようである。

生きものに光分け合ふ十三夜 森谷 清子
十三夜は日本で始まった風習だが、十五夜では月に豊作を願
い、十三夜は、稲作の収穫を終える地域も多いことから、秋の
収穫に感謝しながら、月を愛でる。植物だけでなく動物たちにも
も十三夜の光を分け合っているのである。

棒稲架や防人の哀告ぐるかに 牛島 晃江
農業の機械化により稲を稲架掛けにして干す風景は年々少な
くなっている。稲架掛けによる天日干しの方法はさまざままで、
縦と横に高く組んだ稲架に何段にも分けて、スケール大きく掛
け干しにしているものもあれば、一本の杭に何重にも稲束を重ね
て干す方法もある。その棒稲架の姿に作者は昔都から遠い地へ
防人として赴任した役人の姿を思い浮かべた。

鮭 遡上 漁師 声 あぐ 居 繰 網 本間 照子
本間さんは新潟の方だが、「居繰り網漁」は新潟県村上に流
れる三面川に伝わる伝統的な漁法。三艘の川舟を川の流れに乗
せて、一艘が水面を竿で叩き、二艘の間に張られた網に鮭を追
い込む。鮭の遡上に漁師たちの勢いある声が響いた。

栗飯や静かにしづかに老いてをり 秋谷美智子
作者の青森の秋谷さんは、私より若い方だが、にわかにおっ
てくる「古い」というものを感じ取っておられるのだろう。齢
を積むにつれ食べ物の嗜好も変わってきて、栗飯が美味しく感
じた。

縄文の石笛 響く 櫛 あかり 椎木 亜美
よく博物館などで、縄文時代に使ったであろう石笛が展示さ
れている。オカリナに似た感じの、素朴な石笛できっと縄文の
世でもこの石笛が野山に響き渡ったであろう。暖炉に燃える櫛
明りを見つめていると縄文の世が目の前に蘇ってきた。

百年を生くる途中の、日向はこ 神尾 芳秀
人生百年時代と呼ばれる昨今。自らの健康と周囲の環境にも
恵まれて、百年を生き抜こうという気持は前向きですばらしい。
日向はこをしながらも、これからの人生プランが明るく広がっ
てきた。

※

振り向けばみな消えてゐる夕花野 村上 葉子
この句で詠まれた「消えてゐる」とは何であろうか。花野を
訪れていた人が皆帰ってしまったのか、それとも花野の景色自
体が夕闇に包まれてしまったのだろうか。とにかく不思議な句
である。

生きるとは繰返すこと鳥渡る 中村 重幸
人間の営みは繰り返しこそが生きることそのものなのであ
る。食べること、寝ること、あらゆる命がそれを繰り返してい
る。生きるということは、人も獣もその営みを繰りかえさず
は生きられない。毎年渡りを繰り返す鳥たちもまた同じなので
ある。

(潮鳴集より)

初雪の消えやすきさまいとしかり 小野 寿子
未だ暖冬の気配がある日本列島であるが、青森はもう初雪が
降ったのだろうか。初雪なので、降ってもゆぐに消えてしま
うような降り方で、それはそれで愛しいものがある。

曼珠沙華いくつのまさか越えきしか 頓所 友枝
「信じられないというような気持ち」「まさかこんなことは起
こらない!」、そんないくつもの「まさか」を気丈な心で乗り越
えられてきたのだろうか。作者の来し方に思いを馳せれば、この
句に頷かずにはいられない。

(蒼茫集より)

潮鳴集

鳥渡る

中村重幸

どんぐりに先をこさるるすべり台
そぞろ寒仏は石の衣着て

*生きるとは繰返すこと鳥渡る
古びたる机にぬくみ長き夜
突出しのおからの味も新豆腐

夕花野

村上葉子

もうけむり出さぬ煙突鳥渡る
魍魅らの祝祭ならむ紅葉山
亡骸の赤凜凜と秋あかね
缶蹴りの缶の残さる秋の暮
*振り向けばみな消えてゐる夕花野

痩せ我慢

榎本秀治

*痩せ我慢通し切つたり鷹の爪
揚浜に汐まく音や秋寂びぬ
爽やかや矢を射し後の立ち姿
末枯るる草みな低き龍飛崎
落日の色を重ねて吊し柿

書架の本

兵藤

恵

初鴨の着水ぎこちなく陽気
ラ・フランス静物として凭れ合ふ
*書架の本の息抜いてやる神の留守
片方の手袋残り午後は雨
木枯し一号厨房の見ゆる席

男 星 くだう ひろこ

家計簿に供花と書きたる小夜時雨

* 狐期来る白神岳に男星

神無月身構へて読む運氣欄

懸崖菊百の結び目茎一つ

枯るるもの枯れて四辻の道祖神

弓返り 道端 齊

山深き飛驒天領や水の秋

下の名で呼び合ふ村や赤のまま

* 追ひ風に弓返りしたる雁の棹

鷹一羽舞上げてゐる気流かな

舊漢字読み書きしたる文化の日

柿の秋 岡澤 田鶴

ふしくれし雁木に月日水の秋

しろがねの波を抜手にすすき原

* 開け放つ田の字の間取り柿の秋

杉木立ぬけ秋冷の百度石

行く秋や一人ひとりが影つれて

海溝 栗坪和子

* 鯨来るあらためて見る海溝図

灯ともして番屋にうるか作りかな

久留里線刈田に人を降ろしけり

秋の日や老いし牛の眼吾を見ず

しほがまのほるとこぼるる小六月

ピアニツシモ 川 高郷之助

* 音あらばピアニツシモなり鯛雲

闇よ深まれ深まれと虫時雨

文机をねんごろに拭く子規忌かな

ページ繰る指先乾く夜半の秋

ふるさとの蝦夷産とあり走り蕎麦

秋 燕 伊藤 文

* 冬の暮連山鴝色がかりかな

冬菜畑ひと株ごとにある気合

早世の父の事など蜜柑むく

秋燕美しき語残し逝きたまふ

秋燕や句会段取り成し遂げて

令和六年沖・結社賞発表

第五十二回 沖 賞 頓所 友枝

句集「秋へ書く手紙」
および年間の業績に
対して

第五十二回 沖 賞 林 昭太郎

句集「花曇」および
年間の業績に対して

第五十二回 沖 賞 能美 茅柴

句集「悠縮」および
年間の業績に対して

沖特別賞 宮坂 秋湖

句集「葦雲塔」および
年間の業績に対して

第四十六回 珊瑚賞 埴 誠一郎

句集「家系図」
およびこれまでの業績
に対して

第五十二回 新人奨励賞 坂井 博

年間の業績に対して

第五十二回 新人奨励賞 吉村 さよ子

年間の業績に対して

以上の通り授与します。

令和六年一月

沖主宰

能村研三

沖選考委員

蒼茫集推薦

阿部 眞佐朗
七田 文子
本池 美佐子
広海 あぐり
鈴木 齊夫

同人推薦

坂井 博
吉村 さよ子
市川 和子
久間 早苗
山中 洋子
柿内 清一
長山 正庸
岩波 博庸
青木 幹晴
中谷 恭子
工藤 邦子
竹田 絹子
頓所 敏雄

沖作品



能村研三選

天迎へのぼる途中の月の霞 東京 曾根新五郎

十六夜の裏返されし写真たて

中央のハープ月夜のコンサート

写真より飛び出してゆく七五三

*松はみな風のかたちの鳥の秋

*火屋あかりのみの湯に入る枯木宿 埼玉 工藤 良不

ジビエには地酒地ビール薬喰

葉虫つくほどの葉つばや旨からむ

小三治の間の取り方や冬ぬくし

奥八女の俊才天へお茶の花 (俳人石原杏)

四万十の子持鮎食むほくほくと 千葉 矢野 隆男

*太古より空の背骨や天の川

高千穂の狭き回廊水の秋

五百年繋ぐ鞠子のとろろ汁

蔵付きの酵母ささめく新走

言祝ぎは次への一歩富士さやか 池田 文枝

一郷の溶け込んでゆく霧の海

夫 訳す父の方言草の秋

山肌に色を落としてしぐれ虹

*伴走者の網の手応へ冬ぬくし

*栗食むや縄文の滋味身の中に 東京 川和 宏平

灯り消し吾が影と酌む月今宵

水澄むや堀の石垣尖りたり

石狩に跳る銀鱗水の秋

秩父路や翠鬱けおる初時雨

比叡の灯の絶ゆることなき鶴のこゑ 東京 石原 杏

奥院に天狗柄むやも貴船菊

腰縄の女もすなる松手入

冬に入る夜汽車の明かり歌々と

*冬天へ威を反り上ぐる大甍